

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

触文化への気づき、触文化からの築き：  
全盲フィールドワーカーが観た風景

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4308">http://hdl.handle.net/10502/4308</a>

発表記録5

## 触文化への気づき、触文化からの築き

～全盲フィールドワーカーが観た風景～

広瀬 浩二郎

### ■「見る文化」と「さわる文化」

みなさん、こんにちは。広瀬です。よろしくをお願いします。

先ほど鳥山先生のお話が終わって、みなさんダーッと出ていったので、もう帰ってこないんじゃないかなと心配しましたが、ちゃんと戻ってきてくださり、ありがとうございます。午前中2時間めいっぱい、みっちり観察・触察をされたので、お疲れなのではないでしょうか。鳥山先生からも「午後はお楽しみ」という言葉がありましたので、気楽に聴いていただければと思います。

僕の話はいつも出たところ勝負なのですが、今日も持ち時間40分しかないので、雑談ばかりしていると、すぐに終わってしまう。でも残念ながら(!?)雑談をやめるなんてことはできないので、資料をたくさん用意してきました。初めに、配布資料についてご説明します。

これは工夫じゃなくて、たまたま結果的にそうなったんですけれども、僕の資

料は、まずA4もので2枚のレジュメ、筒条書きにした要旨があります。次にB4で3枚もののコピーが入っています。これは資料番号で言いますと、資料Ⅱ・Ⅲ・Ⅳです。最後に大きなA3の3枚もの、雑誌のインタビュー記事で資料Ⅰとしています。

この資料類を事務局に送る時に、A4のレジュメ、B4の資料、A3の資料ということで、3種類の紙を使っているもので、これはあまり美しくない、ほんとうなら紙の大きさを揃えるべきだと思いました。しかし、ふとそこで気づいたのは、今回は「さわる」ワークショップですので、紙の大きさが違うのは、見た目には美しくないけれども、さわった手には便利だろうということです。

ちなみに、さらにこの資料は合理的にできておりまして、まずA4のレジュメは今日の僕の話が終わったら捨てていいものです。それからB4の3枚ものは、ちょっとだけおもしろいと思うので、帰

りの電車の中、バスの中で読んでいただきたい。そしてA3の3枚ものは、僕としてはわりとまじめに書いた文章なので、できれば家に帰って、眠くなる前に、まあお酒は飲まないで読んでいただければありがたいです。このように中身を読まなくても手触りで区別できるように分類しております。

もう一つは、企画展「さわる文字、さわる世界」のパンフレットです。終わってしまった展覧会ですが、たぶん来てくださった方もいると思います。このパンフは、後ほど少しだけ説明で使います。

以上、配布資料は参考的なものばかりなので、バスなり寝床なりで読んでいただければ十分です。今日はなんとなくA4の2枚もの、箇条書きにしたレジュメをチラチラ眺めながら、僕の雑談を雑然と聴いてください。

#### ■見えないからこそ、おいしいラーメン！

まずレジュメを眺めると、いきなり「ラーメン屋」が出てきますね。早くも雑談モード突入です。昨日の各先生方のご発表の流れから考えて、若干気になっていたんですけれども、たとえばネイチュア・フィーリングにしても絵画の鑑賞にしても、見えている人が見えない人を支援するというのが当たり前です。五感を使える健常者が四つしか使えない障害者をサポートしてあげる。現実生活ではそういうことが多くあるわけですし、べつ

に発想としては悪いことではありません。

さて、ラーメン屋のエピソードをここで紹介したいのですが、じつはラーメン屋のネタがいろいろあります。二つか三つ学生時代の思い出を話そうと考えていたのですが、とっておきの新ネタを昨日1個仕入れましたので、ホカホカの話題を披露しましょう。



僕は京大の周辺に12年ほど住んでおりましたので、第二の故郷という感じがです。今回、大野先生のお招きにより京大で話ができるのは、僕にとってたいへん嬉しいことです。でも、京大に来るよりもさらに嬉しかったのが、12年間通い続けたラーメン屋に立ち寄ることでした。昨日、お昼のお弁当を出していただけるという話を聞いていたのですが、日曜は定休日だし土曜の昼を逃すわけにはいかないと決意し、まずラーメン屋に寄ってからこちらに来て、何食わぬ顔で弁当をまた平らげました（笑）。

2、3年ぶりでそのラーメン屋に行っ、あれこれ昔のことを思い出しました。ちなみに、ラーメン屋の宣伝をしても僕

は何ももらえませんが、東大路のもう一本西の鞠小路という小さな通りに面した「東京ラーメン」というお店で、78歳のおじさんがやっています。その東京ラーメンに僕は学生時代から週3回4回ペースで通って、おかげさまでこんなに大きく（太く？）なってしまいました。

昨日も、懐かしい卵ラーメンを食べました。「おお、昔と変わってない！」と大感激して食べながら、「けど、何か違うな」と感じました。なんと、チャーシューの数が減っていたのです。僕が昔食べていたころはチャーシューが2枚入っていたはずなのに、1枚しかない。ラーメンをほぼ食べ終わった時に、その厳然たる事実気づきました。僕は当然チャーシューが2枚入っているものだとして、箸で一生懸命に空の丼の中を「チャーシューないぞ、ないぞ」って探ったんですが、やはりなくて、初めて愕然としました。

ここでふと考えたのが、先ほど言った「見える」と「見えない」、つまり晴眼者と視覚障害者の立場です。おそらく卵ラーメンが出てきた瞬間に、見えている人であれば、ラーメンってそんなにいろいろ具が入っていませんから、パッと見て「ああ、チャーシューが小さくなってるとか「2枚だったのが1枚になっている」ということが、幸か不幸かわかってしまうわけです。そうすると、懐かしいラーメンを食べる気分も変わってしまいますよね。「そうか、せちがらい世の中だし、

とうとうここも2枚だったチャーシューを1枚にしたか」と。

3枚が2枚になるのだったらそんなにショックは受けないんですけど、何といっても2枚が1枚というのは半減ですから大ショックです。それが見えてしまうと、どうしても味にも影響がある。「ああ、おやじ、もうしょうがないなあ、ケチったな」とか思いながら食べる。

ところが幸いにも、チャーシューが減ったことが見えずに食べていた僕の場合、食べ終わるまでの何分間かは、まさに至福の時でした（笑）。「ああ、懐かしい、おいしい」と感動しつつ食べて、最後の最後で消えたチャーシューに気づきガクッときたわけです。しかし後で考えてみると、ラーメンを夢中ですすった5分くらいの時間、その至福の時は、僕の目が見えないからこそ体験できたものだったのです。

このように時々、見えないからこそ味わえるユニークなことってあります。先ほど言ったように、この世の中は見える人、健常者といわれる人々中心にできていますので、僕たち視覚障害者は圧倒的に不利益、ある種の悔しさを感じるケースが多いわけですが、いつもいつも不自由、不便ばかりじゃつまんない。時には見えなくて「得したな」とか「おもしろいな」という経験がないと、人生やっつけられない。昨日、瀬川さんがいろんな人と出会えるという話をされていましたが、

それも視覚障害者ならではのユニークな体験といえるでしょう。

高尚なるネイチャア・フィーリングとラーメン屋を並べるのは瀬川さんには申し訳ないのですが、見えなくて得した例として、僕の卑近なエピソード、こじつけ話を紹介しました。早くもラーメン屋の雑談で10分近く経過しています。この先どうなるのか、まったく見えない状況ですが、見えない方がおもしろいことを信じて(!?)、あまり深く考えずに話を進めます。

#### ■企画展の裏話

では、「さわる文字、さわる世界」展の話に移りましょう。終わってしまった企画展についてくどくど説明するのはやめますが、展示物の解説がパンフレットの中間に写真入りで書かれています。

まず、このパンフレット。これは企画展の一つのシンボルでした。最近の博物館において、点字パンフレットは当たり前とまではいえませんが、ちょいちょい見かけるサービスになってきました。今回の企画展の趣旨は、さまざまな人に“気づき”を与えることでした。展覧会のサブタイトルは「触文化が創りだすユニバーサル・ミュージアム」というのですが、“気づき”のきっかけ作りとして点字が入っているパンフレットをすべての来館者に配りました。

もちろん、みんないっしょというのが

ユニバーサルだとはいえないのですが、今回の企画展の狙いは、「点字＝視覚障害者用の特別なサービス」という従来の常識を打ち破ることでした。期間限定の企画展だからできた出血大サービスです。「点字と普通の字が併記されたパンフをみんなに配ろう!」、これは自分で言うのもおこがましいですが、なかなかいい発想だったなと思います。

ところが、現実と理想はちょっと違いました、パンフは特殊な印刷技術を使うため、けっこう高額になります。あまりお金の話をするのはお行儀よくありませんが、1部が100円ほどです。それを数万部作って配布したわけですね。建前としては来館者全員にパンフを持って帰ってもらうことになっていたのですが、企画展開幕直後、春の遠足などで子供たちがダーッと集団でやってきました。「この調子だと、すぐにパンフがなくなってしまうぞ」とあせって、小学生の団体見学が入っている時はパンフを隠すという姑息な手段をとることにしました(笑)。

すると、8月になってふと気づいたら、たくさん余っているんです。こんなことなら子供にあげればよかったと急遽方針を転換して、どんどん配るようにしました。それでも、幸か不幸かパンフが余りまして、「100円もするんだぞ」と少し恩着せがましく言いながら、今回のようなワークショップなどで有効活用しています。まあ、企画展に来ていただけなか

った方にも「さわる文字、さわる世界」を体感してもらえるのだから、パンフがあることを知らなかった遠足の子供たちもそんなに恨まないでしょう、たぶん。

パンフレットの中面、展示物の写真を見てください。左ページが文字関係の資料ですね。点字が発明される以前に使われていた「さわる文字」、いわゆる浮き出し文字と呼ばれるものです。鳥山先生のお話の中にさわり方についての指摘がありました。僕は「小さくさわる」「大きくさわる」という言い方で区別しています。点字もそうですが、左ページにある多様な浮き出し文字をさわる時は、指先に神経を集中させ、小さく手を動かして細かい部分を探っていきます。

一方、右ページには、神社の模型とか観音様など、さわって楽しい模型が載っています。こちらは少しさわり方が違って、大きくさわる。指先というより手のひら全体を前後、左右、上下に動かして、点だった情報をだんだん面から立体へと広げていきます。部分をつなげて全体にする、自分なりのイメージを創っていく作業です。時には小さく、時には大きくさわって触文化の魅力を感じてほしいというのが企画展のコンセプトでした。

#### ■梅棹忠夫氏の「絶望」

企画展終了間近の9月のある日、あの梅棹忠夫先生が来てくださいました。みなさん梅棹先生の名前はどこかで見聞き

されているでしょうし、京大理学部のご出身ですから、大野先生の大先輩ですね。80歳を過ぎた今でも著作活動をおられて、大きな本屋さんに行くと棚いっぱい梅棹先生の著書が並んでいます。僕の職場、民博の創設者ですから、あまり持ち上げるのもよくないんでしょうけど、客観的にたいへん偉大な方だと思います。戦後の日本を代表する知の巨人ですね。

その梅棹先生、20年ほど前に突然目が見えなくなりました。中国の方を調査されていて、細菌が目に入ったのが原因だそうです。『夜はまだ明けぬか』というエッセー集も書かれています。薄ぼんやりとは見えていても、ほとんど視力がなくなった。大天才の梅棹先生も、さすがに60歳を過ぎてからの失明だったので、ほんとうに苦労されたようです。一般に、中高年の中途失明者が点字を習得するのはなかなか困難です。しかも、あれだけ世界各地を歩き回って、いろんな文物を見て考えて、独創的な論文を書いてきた人ですから、歩く・見る・読む・書くには欠かせない視覚が使えなくなったショックは大きいでしょう。チャーシューが半減したなんて瑣末な出来事は比べ物にならない、いや比べるのも失礼ですね。

秘書の方が「さわる展示だから梅棹先生にも楽しんでもらえるのではないかと、僕に案内役を依頼してこられました。

僕にとっても名誉なことなので、拙い説明をしながら、いっしょに展示場を回らせてもらいました。梅棹先生、民博の展示場をゆっくり歩くのは数年ぶりとのことでした。

パンフレットの左ページにあるような「さわる文字」を一生懸命にさわられた梅棹先生、「まったくわからん。絶望的や」と何度もおっしゃいました。僕が「そうですか、難しいですよ」と言うと、「君は読めるのか」とのお尋ね。「漢字はだめですが、仮名なら読めます。これがア、そしてイですよ」と読んでいたら、梅棹先生が「君は偉いなあ」と、しみじみとおっしゃいました。僕は単純ですから、偉い人に「偉いなあ」と言われたら、「そうか、俺は偉いんだ!」と思って、だんだんいい気分になってしまいました(笑)。梅棹先生は相変わらず「絶望的や、これも読めん、あれもだめだ。絶望的や、絶望的や」と連発しておられます。

そのうち僕の中で「絶望的」という言葉がマイブームになりました。実家に帰った時に、ガスの調子が悪くて風呂のお湯が出なかつたりしたら、「母ちゃん、お湯が出ない。絶望的や」と一言。母親は何ってことないのに「絶望」を繰り返されて腹が立ったみたいで、「私はおまえを産んだ時から絶望してるわ」って言っていました(笑)。

この「絶望的」という言葉、じつは目の見えない人の不自由、不利益を象徴し

ています。先ほど述べたように、普通の人以上に視覚を駆使してフィールドワークをされていた大先生が、急に視覚を使えなくなる。よく僕は視覚を「使えない」と視覚を「使わない」を区別するんですが、現代社会において視覚を使えなくなった人は、絶望せざるを得ない。もちろん、それでも梅棹先生はいろいろ手段を工夫して著作活動を続けているから、真の意味で偉い方、脱帽すべき研究者なのです。

ただ、やはり60歳を過ぎて視覚障害を持ってしまったのは、梅棹先生にしてみると不幸、不便なことであり、僕の例が適切かどうかはさておき、チャーシューの数がどうのこうのなど、視覚を使わないおもしろさという境地にはなかなか思い至らないのだろうなと感じました。まあ「そんな境地、まったくわからん」と言われたら、「えらい、すんまへん」と応じるしかありませんが。

#### ■ルイ・ブライユの「渴望」

この「絶望」という言葉をまず一つのキーワードにします。それに対してレジュメの中で、ルイ・ブライユの「渴望」という言葉を挙げました。絶望と渴望。なんだか言葉遊びのようですが、この二語が視覚を使えないと、視覚を使わないの違いを端的に示していると思います。もう少し文字を例として話を続けましょう。

企画展のパンフレットにもありますように、18世紀後半のフランスで世界初の盲学校が設立されます。ちょうどフランス革命の直前ですね。日本でも明治維新後に視覚障害教育、すなわち特殊教育が始まります。ここで、くれぐれも誤解がないように確認しておきます。じつは、鳥山先生は僕の中学・高校時代の恩師です。だから一生頭が上がらない。頭が上がらなかつたら手か足を上げるしかないわけですが、あの理路整然たる講義には手も足も出ない。今日は高校生に戻って、恩師の真ん前に立たされている気分で、緊張して話しにくかったり……、しませんけれども（笑）。

鳥山先生のお話を聴かれたみなさんは、盲学校ってすごい所なんだ、生徒も優秀だし先生も熱心だと、驚き感動されたのではないのでしょうか。たしかに、すごい先生はいますし、僕と鳥山先生がいた東京の盲学校は全国から生徒が集まっていたので、頭のいい視覚障害者もいました。でも、当然どこの学校もそうですが、いいかげんな教師もいますし、チャーシューの数で騒いでるようななさけない生徒もいる。いい意味で盲学校は特別なんだとお考えになる方が増えると、それはそれで困るので、十人十色の先生、生徒が集まっているという当たり前の事実をあえて強調しておきましょう。

その盲学校教育がスタートした当時は、「文字が見えないならば、さわればいい」

というのが基本スタンスでした。しかも、互換性というほどではありませんが、見えている人が使うのと同じ形の文字をさわるのが合理的だし、教える側もそれが楽だろうと考えられました。パンフレットの写真にあるように、木を彫ったり、ろう盤を使ったり、紙撚（こより）で字形を作ったりして、欧米でも日本でもさまざまな「さわる文字」が用いられていました。

ところが、昨日の塩瀬先生のレクチャーで文字をさわる実験をしましたが、普通の文字をさわって解読するには、かなりの労力と時間が必要です。たとえば、企画展パンフの表紙に「さわる文字 さわる世界」と浮き出し文字で書かれています。わざわざ目をつぶらなくてもいいのですが、これをさわってみてください。「さわる」の「さ」ならば、手を縦、横、斜めに動かさないといけない。「わ」はもっと複雑ですね。

まさにこの時間と労力こそが、さわることの特質なのだと思います。そして、それは触覚の弱みであり、強みともなるのです。目の見えているみなさんならば、「さ」にしる「わ」にしる、パッと瞬間的にイメージ、像として入ってくる。一目瞭然で「さ」なり「わ」だというのがわかるんだけど、それを手で認識しようとなると、何倍もの時間がかかってしまう。まして漢字になると至難の業です。たぶん、浮き出し文字による教育がずっ



と続いていたら、今ごろ僕も卵ラーメンを食べる余裕などなく、絶望していたことでしょう。

19世紀になって点字が考案されたのは、視覚障害教育において画期的なことでした。単純に考えて、さわって文字を読む際、線をたどると点々をたどるのでは、どちらが速いか、どちらが合理的なのか。どう考えても点々をさわる方が簡単だし、理にあってますよね。たとえば、パンフレットの裏に点字の一覧表が載っていますが、アだったら、チョンと1点だけ打てばいいわけです。それは指先でパッとさわればアなんです。アを線文字で確認しようとするれば、上下、左右に手を動かさないといけない。線から点へ。これは視覚障害者の読み書きにとってコペルニクス的な転回でした。

線をやめて点にしようという提案したのが、自身も全盲だったフランスのルイ・ブライユさんです。最近では教科書などで彼の伝記を読まれている方が多いかもしれませんが、なんと弱冠16歳の時に点字の配列表を完成したといわれています。もちろんブライユさんも、点々で文字を表記すると、線文字を使っている目の見える人、社会の多数派との互換性がなくなるということで、ずいぶん葛藤があったようです。しかし最終的には、自己表現、情報伝達の方法として独力で速く正確に読める・書ける文字である点字を体系化する。それが世界に普及するのですね。

点字誕生の背景には、僕の言葉でいう「渴望」、なんとか自分も自由に読み書きができるようになりたいと願う情熱がありました。これは、まさに梅棹先生の視覚が使えない絶望に対して、視覚を使わない世界、ある種の開き直りから出発した一つの到達点として評価できるものだと思います。

#### ■古文書は読めない、それとも読まない？

梅棹先生、ルイ・ブライユの後で、ガクッとレベルが下がりますが、僕自身の体験談をお話します。古文書に関するエピソードです。今日は僕の同級生で京大博物館に勤務している岩崎先生が来てくれています。専門家の前で、いいかげんな話をするのは恥ずかしいのですが、僕は日本史学科、入った時は国史学科というおりましたが、そこでずっと岩崎さんといっしょに勉強していました。

国史学科に入ると、まず古文書を読まないといけないわけです。いい意味でも悪い意味でも、古文書が読めて一人前の歴史学者というか歴史専攻者として認められる面があります。僕の場合、単純に司馬遼太郎がおもしろいとか、昔からチャンチャンバラバラやるテレビのドラマが好きだったとか、そんな安易な発想で国史学科に進学したので、古文書を解読するたいへんさには、あまり意識がいていなかった。

大学3年生になって、いよいよ古文書

演習が始まりました。みなさんも古文書をなんとなく見たことがあると思いますが、いわゆるミミズがのたくったような字で書かれた日本の古い文書です。目の見えている同級生は、崩し字辞典など虎の巻を使って、だんだん慣れて読めるようになる。ところが僕の場合、崩し字そのものはまったく見えないので、手も足も出ない。一般のボランティアでは点訳も音訳も難しいでしょう。さて、どうしたものか。

国史学科の主任教授も心配して、いろいろ調べてくださいました。「広瀬君、立体コピーという便利な機械があるそうだね」「はい、あります」「じゃあ、古文書を立体コピーして、それをさわったら読めるんじゃないの？」僕はあまり深く物事を考えない方なので、偉い先生が言うんだから、きっと読めるに違いないと思って、「先生、それは画期的なアイデアです！」と、一も二もなく賛成しました。

当時の京都大学はそれなりにお金持ちで、ありがたいことに数十万円の立体コピー機をすぐに入れてくれました。次の週の授業で、先生が古文書を立体コピーしたものを持ってこられました。単なるコピーですから文化財でも何でもないんですが、さも昔の重要な原物の史料を捧げ持つようにして、ドンと僕の前に置きました。「どうや？」僕はパッと手でさわった瞬間に、「ああ、これはだめだ」と感じました。でも、数十万円かけてコピー

機を買ってもらったので、軽はずみな発言はできません。そこで、しばらく「うーん……」とか言って悩んでいるふりをしました。30秒くらい粘って、そろそろいいかなとタイミングを見計らって、「先生、これでは……、ちょっと難しいんじゃないでしょうか……」と言いました。

そうすると、さすがは偉い先生、またいろいろ考えてくださって、「そうか、これは少し字が小さすぎるから難しいのかな。では、拡大して、それを立体コピーしたらどうだろう」とおっしゃいました。単純な僕は、再び偉い先生が言うんだから、きっとそうだろうと納得しました。「そうですよ、先生、拡大しましょう！」次の週、先生がまた期待を込めて「どうや？」今度は10秒くらい頑張りましたがやはり、「ああ、だめだ」とあきらめました。30秒ほど、「うーん……」とやって、「やっぱり先生、ちょっと……、これは無理なのでは……」と、辛い告白をしました。

そんなわけで、立体コピーで古文書をさわって読むという計画は具体化されませんでした。さあ今、あの京大の立体コピー機はどうなっているのか。埃をかぶっていることでしょうね。大野先生、立体コピーは黒い部分が特殊なインクで浮き上がる単純で便利な機械なんです、このワークショップでも利用できると思います。ぜひ埃を払って「どうや？」と

ご機嫌うかがいしてやってください。コピー機も喜ぶのではないのでしょうか。

否定的なことばかり言ってきましたが、立体コピーによる古文書学習にも、多少おもしろいことがあります。今日は中世文書を立体コピーしたものをいくつか持ってきました。まず1枚目は、足利義満が仏舎利をもらう話です。これは、わざと斜めに書かれています。書き手が下手で斜めになっているわけではなく、仏舎利を8個もらった者、2個もらった者、1個だけの者と、高位の人から順番に並んでいます。8から1へと、だんだん行の書き出しが下がっていくのが、さわって理解できます。回覧してもらってもいいですか。くれぐれも視覚障害の方は「うーん……」と悩まずに、さらっとさわって回してくださいね（笑）。

細かい説明は省略しますが、古文書にはいろいろな様式があります。この辺で、いいかげんなことを言ったら専門家に怒られそうですが、たとえば花押の位置によって袖判とか奥判などに分類されます。国司や将軍が部下に発給した文書の場合、右側にボンと花押があります。花押の位置や形を知るには立体コピーが役立ちます。

もう一つ、興味深い文字史料を持ってきました。「八幡大菩薩」と書いていますが、これは足利尊氏の直筆です。単なるコピーだから捧げ持たなくてもいいのですが、なんとなく品格を感じますよね。

僕は昔の文字そのものはあまり見たことがありませんが、「これを尊氏が書いたのか」と思ってさわると、やはり格調高い字だなという気がしてきます（笑）。

このように立体コピーを使って古文書を勉強することは、様式などを知る意味では有効かもしれませんが、ただ、文書の内容をさわって解読するとなると、まさに絶望的です。仮に一生懸命さわって1字か2字読めたとしても、実際にその文書を理解することはできない。どんなに僕が触覚を鍛えたとしても、目でスラスラ古文書を読み込んでいく同級生に太刀打ちできるはずがない。

ここで「絶望的や」と、二十歳そこそこで人生を終わるわけにはいかないの、僕なりに考えました。何の解決にもなっていないませんが、古文書は「読めない」というんじゃなくて、「読まない」ようにしよう、というのが僕の結論です。わずか1字の違いですが、この「読まない」境地に至るまでには、けっこう時間がかかりました。現在、僕は歴史学とはやや離れることになりましたが、フィールドワーク、聞き取り調査を重視して、民博で自分なりの研究を続けています。ルイ・ブライユの線から点への転換に比べれば、僕の座頭市流フィールドワーク誕生秘話なんぞは、なんともしょぼくれた渴望ではあります。

#### ■「さわる絵」の可能性

今、時計を見て残り時間をチェックして、絶望的になっているんですが（笑）、どうしても絵の話は少しだけでもしたいと思います。昨日、塩瀬先生の発表の中で絵画鑑賞の話が出てきましたね。言葉による美術鑑賞は英語で「ヴァーバル・イメージング」といいますが、最近は日本各地で行なわれるようになりました。僕は最初ニューヨークのメトロポリタン美術館で体験しましたが、英語の問題もあって少し難しかった。その後、関西でのツアーにも何度か参加したこともあります。

もちろん絵画はさわれないものですから、言葉で説明してもらえないわけです。そもそも芸術には多様な楽しみ方があるはずだし、言葉による鑑賞もコミュニケーションとして豊かな可能性を持っているのは確かです。ただ、今日は美術館・博物館関係の方も多数いらっしゃるので、率直な疑問も提示しておきます。

晴眼者と視覚障害者の対話ということを考えてみましょう。たとえば中途失明の人で、もともと絵が好きで絵画作品をたくさん見たことがある、あるいは絵について勉強していたとか、わりと知識、経験がある方ならば、晴眼者の解説からイメージを広げていくこともできると思います。視覚障害者からもどんどん質問をして、対話のキャッチボールが成り立つでしょう。

僕は中学生まで目が見えていましたが、

有名な絵などはほとんど見たことがない。そうすると、説明をする人、される人というように、ややもすると対話が一方的になりがちです。どんなにすばらしい言葉による解説を受けても、見えない人のイマジネーション、クリエイションの力が不足していたら、キャッチボールにはならないわけです。

生まれつきの全盲の方などの場合も、おそらく僕と同じようなもどかしさがあると思います。けっきょく、絵画とは基本的に視覚で味わうものですから、晴眼者と視覚障害者では持っている情報量に圧倒的な差がある。ヘビー級のボクサーとフライ級のボクサーが試合しているようなもので、コミュニケーションとしてはどう考えてもバランスが悪い。

そこで視覚情報を触覚情報に置き換える新しい取り組みとして、「さわる絵」というものがあります。僕の企画展でも「さわる絵」の試作品を3枚ほど展示していたのですが、賛否両論という感じでした。「こんなのまったくわからん」と言う人もいたし、「これはすごい」と感心してくれる人もいました。今後、いろんな人の意見やアイデアを取り入れて試行錯誤を繰り返していけば、触覚の独自性を引き出すようなおもしろい「さわる絵」が工夫できるかもしれません。

僕がいつも強調しているのは、たとえ不完全な「さわる絵」であっても、すくなくともないよりはあった方がいいとい

うことです。二次元の表現をどれだけ「さわる絵」として伝えられるのかというのは永遠のテーマですし、古文書の立体コピーとは異なり、たとえばモナリザの有名な絵をどこまで三次元化していいのかなど、芸術作品の場合は微妙な問題もあります。

サンプルとしてニューヨークのタッチ・グラフィクス社が作製した「さわる絵」を持ってきました。ザラザラとツルツルなど触覚ならではの表現を味わうと同時に、色も着いているので、視覚情報と触覚情報の置換可能性も考えながら、回覧してください。評価は分かれるでしょうが、やはり僕は言葉だけの鑑賞よりは「さわる絵」があった方が嬉しい。対話面においても、フライ級だった人がミドル級くらいにはなれるんじゃないかなという気がします、如何でしょう。

こうして雑駁な話題提供のようなことばかりしていて、時間がなくなりつつあります。レジュメに挙げた武道の話は省略します。「見る」と「観る」の相違について触れたかったのですが、一言で要約すれば、「見る」とは目を使う視覚的な行為、「観る」とは第六感というか、視覚以外の四感を駆使して身体で感じることとなります。視覚障害者は「見る」ことができなくても、その分「観る」ことは得意なのではないかと言いたいのですが、何のことやらよくわかりませんよね。この辺は、配布資料で補っていただければ

と思います。

#### ■ユニバーサル・ミュージアムとは何か

最後にユニバーサル・ミュージアムについて少し説明することにしましょう。たぶんQ&Aコーナーになって、いろいろ質問されてもいいかげんなお答えしかできませんので、ずうずうしく質問時間を齧って勝手にお話を続けることにします（笑）。今年2月にアメリカに2週間ほど出張したのですが、その時の話題をいくつか紹介しましょう。

今回は主にシカゴに行っていたのですが、写真を4枚ほど回覧します。1枚目は、シカゴ美術館（Art Institute of Chicago）での写真。ここは全米を代表する大きな美術館です。コレクションはたいへん充実していて、日本関係の展示品も多数ありました。その館内に、規模は小さいんですけども「タッチ・ギャラリー」が設置されています。そこには、ブロンズと大理石の彫刻が5体並んでいました。数は少ないのですが、点字のキャプションなどもきちんと付いています。

ギャラリーの解説パネルは、次の文言で始まります。「このギャラリーは、『手で触れる』という行為が芸術鑑賞をいかに豊かにするものか、来館者に経験してもらおう貴重なチャンスを提供します。触れることを通じて、人は芸術作品を形や線、サイズやスタイル、温度、素材といったもので識別できるようになります。

それらは視覚だけでは感じることでできないものです」。

さて、「タッチ・ギャラリー」の何が素晴らしいのでしょうか。日本でも最近、彫刻にさわってみようなどという取り組みが増えていますが、視覚障害者用というのでなく、「タッチ・ギャラリー」はすべての来館者に開放されている。だから、見える・見えないに関係なく、さわる楽しさ、奥深さをみんなで体感しましょうというのがコンセプトなんですね。こんなギャラリーが全米有数の美術館に小規模だけど堂々と置かれている。実際に僕が訪問した日も、子供たちが喜んでさわっていました。

僕は「さわれる展示」から「さわる展示」へ、というスローガンをよく使っています。今までの博物館・美術館では、一部の展示物にだけさわれますよ、さわってもいいですよという一歩ひいた位置付け、あるいは見る人ができない人の見学・観覧を補うための特別な手段として「さわれる展示」がありました。それに対して、僕の企画展のテーマでもあったのですが、触覚の潜在能力と可能性をあらゆる来館者に訴えるのが「さわる展示」です。「さわれる」ではなく「さわる」という発想のギャラリーがシカゴ美術館に常設されていたのはすごいなと感じたし、「先にやられたな」とも思いました。

2枚目のミイラをいじくってる写真ですが、これはシカゴ大学の「オリエンタ

ル・インスティテュート」、エジプトやメソポタミアなんかのことを研究している大学博物館での様子です。シカゴ大学って伝統ある一流の大学ですし、博物館でも早い時期から子供向けのプログラム開発に努力しています。これは写真の出来がいまいちですが、小学校での授業用に作られたミイラの人形があるので「さわってごらん」と勧められました。さわってみたら、のっぺらぼうだし、ウレタンのような感じでさわり心地もよくない。たけうちさん、西谷さんたちが作られた貝の模型の方が精巧だし、「たいしたことないや、やはりアメリカ人は細かい作業はだめやな」と密かに思いました。

ところがこの人形、けっこう笑える細工がありました。ベリッと脇腹のファスナーを開けたら、体内に手が入るようになっていきます。布製の内臓は自由に取出せるようになっており、この人形でミイラの作り方を勉強することができるわけです。内臓を取り出して塩の袋を入れるとか、まあミイラの実物は作れないし、あまり作りたくもないですが。

怖いもの見たさというか、ちょっと気持ち悪いけど興味もある。こういう体験学習って、子供は大好きですよ。僕は世界の大学博物館の状況についてあまり知りませんが、シカゴ大学の地域に開かれたプログラムは、かなり進んでるんじゃないかなと感じました。もちろん、大野先生を中心に京大博物館でも、コミュ

ニティに根ざしたさまざまなプロジェクトが進行中です。子供向けのプログラムではアメリカ・ヨーロッパの大学博物館が先んじているかもしれないですが、一つだけ言えるのは、今回のように視覚障害者を意識したワークショップが大学博物館で開催されるのは、おそらく世界的に見ても珍しいことだろうと思います。ですから、このワークショップは画期的だし、ぜひ継続してほしいなど、ここで少しヨイショをしておきます（笑）。

3枚目は、どうでもいい写真ですが、さりげなく、厚かましく自慢話を少々。シカゴ大学でのメインの仕事は、企画展「さわる文字、さわる世界」の成果について講演することでした。演題は「The Richness of Touch」。30人ほどの大学院生、教員を対象とした小さなレクチャーだったんですが、それなりに好評でした。

僕は英語が苦手なので、アメリカで講演する場合、とりあえず英文原稿を一生懸命書いて、ひたすらそれを棒読みします。喋る英語はいわゆるブロークンで、だいぶ怪しいのですが、僕が書く原稿は点字ですよ。点字というのは意外と便利で、書いた原稿をさわりながら読んでみると、一見堂々としているように錯覚されるんです（笑）。普通の人が目で原稿を読むと、どうしても下を向いたりするんですが、僕は常に聴衆に顔を見せている。まあ、僕の顔なんぞ見たくない人も

いるでしょうが、とりあえず内容は二の次で堂々としている（ように見える）のは重要です。ね。

もっとも、堂々としていられるのは棒読みタイムだけで、質問されると、しどろもどろ状態になってしまうのですが。もう一つ、何が僕にとって苦痛なのかというと、英語で話す場合、悲しいかな棒読みするしかありませんので、おやしギャグが言えないのが、なんともフラストレーションになります（笑）。おやしギャグのない僕の講演を聴いたシカゴ大学のスタッフが幸福だったのか不幸だったのか、その判断は今日僕の日本語での話を聴いてくださっているみなさんにお任せします。

最後に4枚目の写真は、シカゴでの最終日、約10年ぶりのすごい雪が降ったので、寒いというより痛いシカゴの冬景色を写したものです。以上4枚の写真を「タッチ・ギャラリー」の点字の解説書といっしょにお返しします。写真が見えない視覚障害者は、堂々と(?)点字の解説書を読んでください。

僕は基本的に日本が好きですし、べつにアメリカが進んでいるとも思いません。しかし、ユニバーサル・ミュージアム、だれもが楽しめる博物館を考え具体化していくためには、アメリカとも積極的に情報交換しつつ、いろいろ学んでいく必要があります。逆に、たぶん「さわる絵」の技術などでは、日本の方が優れたアイ

ディアを持っているので、僕のブロークン英語では心もとないですが、こちらから情報発信していくのも大切なのではないのでしょうか。

#### ■触文化の創造と開拓をめざして

では、何もまとまらないまとめモードに突入します。今日、みなさんは「さわる」実体験をあれこれされましたが、昨日から話題になっている「さわることをどう学習と関連づけるか」について、僕なりの説明をします。触文化の特徴を示す言葉として、僕は“つくる”と“ひらく”を挙げます。触文化とは、さわらなければわからないこと、さわって知る事実と定義できますが、今回のワークショップのテーマ「触覚を使った学習」の狙いは、触文化の探究にあるともいえそうです。

まず“つくる”ですが、これは大きくさわることによって、部分から全体を創り出すというか、点だったイメージを線から面、立体へと広げていく作業です。たぶん視覚に依拠した生活をしていると、わざわざ“つくる”ことなどなく、一目瞭然でパッと像として情報が入ってくる。それは便利ですが、想像力（創造力）が刺激されることはありません。この“つくる”プロセスにおいて、「これはどうなっているのかな」と、触覚だけでなく頭をいろいろと働かせるわけですね。

情報の量を比べると、点の触覚と三次

元の視覚では、圧倒的に視覚の方が有利です。でも、“つくる”という触覚のイマジネーション、クリエイションの広がり、視覚では得られない人間ならではの知的行為の魅力だと思います。レジユメの前書きでも言及しましたが「群盲象を撫でる」という言葉がありますね。目の見えない人は、大きな象の足など一部分しかさわれない。そこから、凡人は物事の全体を見通すことができないという否定的な意味で用いられる故事です。

たしかに、そういう面もありますが、開き直って、足だったら足を集中的にさわればいいのではないかと。じっくり、ゆっくり、ねっとりさわって、自分なりの像を“つくる”のですね。極論を言えば、ああだこうだと自分の中で像を“つくる”過程にこそ意味があるわけですから、触覚により得られた像が結果的に本物の象と違っていても、それはそれでいいのではないのでしょうか。量（象）から質（像）への転換、これが視覚、あるいは現代人の日常生活には欠けている“つくる”文化のポイントかもしれません。

もう一つの“ひらく”というのは何でしょうか。今日、みなさんも少し経験されたのではないかと思います。たとえば点字を読むことを考えてみます。みなさんは目が見えているから、目で見て点字を読めばいいですよ。鳥山先生は点字を手で読めるんですか？

**鳥山** 読めない。目で読みます。



**広瀬** たまに変な人がいて、手で読める  
 晴眼者の人が出てきたりして困るんです  
 が、今日は変な人がいないようですね  
 (笑)。みなさんも、この企画展のパンフ  
 レットにさわってみてください。もちろ  
 んブチブチしているのはわかりますね。  
 でも、それをじっくりさわっても、どこ  
 が文字の切れ目なのか、なかなか難しい  
 ですよ。僕も最初はそうでした。中学  
 1年の時に点字にさわって、こんなの読  
 めるわけないやと感じました。その時は  
 まだ子供だったので、「絶望的」という言  
 葉は使いませんでした。これはだめだ  
 と思いました。

ところが、それを毎日繰り返しさわっ  
 ていると、だんだん読めるようになって  
 いきます。だんだん読めるようにならな  
 くても、「ああ、だめだ」を反復するうち  
 に、ある日突然「あ、読めた！」という  
 感激の時が来るはず。これが“ひら  
 く”感覚で、大野先生の言葉を借りれば  
 「腑に落ちる」という瞬間ですね。たぶ  
 ん、みなさんにしても中学生の僕にして  
 も、視覚に頼っていて触覚を日常的にあ  
 まり使ってこなかったもので、そのすごい  
 能力、可能性が閉じてしまっていたんで  
 す。僕の場合は目が見えなくなったこと  
 により、必要に迫られて、眠っていた触  
 覚を懸命に刺激しました。その結果“ひ  
 らく”感動を味わいました。

例にするのは失礼ですけれども、梅棹  
 先生のように60何年間も視覚に依存し

て、触覚を意識することが少なかった方  
 は、刺激をしても触覚の潜在能力がなか  
 なか目覚めてくれない。赤ちゃんの時に  
 は、だれもがすごい触覚パワーを持っ  
 ているのに、使わないパワーは徐々に深い  
 眠りに入って行くのです。たまたま僕  
 はまだ中学生だったので、眠りが比較的  
 浅かった。だから、ちょっと刺激を与え  
 ると、「しょうがないなあ」と起きてきた  
 わけです。

今回「さわる」ワークショップに参加  
 されたみなさんには、小学生には隠して  
 いた企画展のパンフレットを差し上げま  
 したので、ぜひこれを毎日、どこでもい  
 いので1分くらいさわって、解読してみ  
 てください。確約はできませんが、何日  
 かすると何人かの方は読めるようになる  
 かもしれない。“ひらく”感動を求めて、  
 寝る前にでも点字の触読に挑戦してくだ  
 さい。きっと、よく眠れるようになる  
 と思います。視覚の場合、閉じるのは寝  
 る時だけで、日々開きっ放しです。です  
 から“つくる”と同様に、やはり“ひら  
 く”も便利な視覚では経験できない文化  
 なのですね。

レジュメの最後に、博物館は“気づき”  
 と“築き”の場であると書いています。  
 今回のワークショップを通じて、みな  
 さん触覚についてあれこれ感じるこ  
 と、「ああ、そうだったのか、なるほど」という  
 発見があったと思います。これがいわゆる  
 “気づき”です。そういうたくさん

“気づき”へのきっかけを与えるのが博物館の役割でしょう。「ああ、そうだったのか」と、腑に落ちる経験。その“気づき”だけで終わってしまうとおもしろくない。“気づき”がどんどん続いていくと、今回の僕の話に引き付けて言うならば、視覚障害者に対する見方が少しずつ変わっていくかもしれない。

たとえば、今までは「視覚を使えないかわいそうな人」「支援してあげないといけない人」というのが常識でした。でも、もしかすると「そうか、チャーシューの数がわからなくても幸せなやつもいるんだな」ということで、「視覚を使わないユニークな人」「五感の潜在力を知るラッキーな人」といった新しい障害者像も生まれるのではないのでしょうか。語呂合わせばかり並べるとコピーライターみたいで安っぽくなりますが（って、もう手遅れですね）、僕は障害を「いやす優しさ」から「いかす強さ」へ、といつも強調しています。

さまざまな“気づき”を通して、何かしら自分の中で意識が変わってくる。そんな人たちが定期的に今回のようなワークショップに集まってくると、そこから新しいエネルギーみたいなものが発せられて、今度は“築き”になります。新しい文化、社会を“つくる”力と“ひらく”心ですね。この新たなる“気づき”から大いなる“築き”への流れを育むのが博物館の可能性であり、今回のようなワー

クショップの意義です。

だから、もう1回最後にヨイショをしておきます。今回、鳥山先生の講演もすばらしかったし、多くの人たちに参加していただき、充実したワークショップができたと思います。準備作業はたいへんでしょうが、こういう形のワークショップを続けていくと、またきっと多様な“気づき”と“築き”が出てくるはずですから、大野先生とスタッフの方々にエールを送って、終わりにしたいと思います（拍手）。質問を受ける時間はまだあるんでしょうか（笑）。

……………Q&Aタイム……………

**西谷** 先生は失明されるまで視覚をお使いになって、明るさとか色というのをある程度認識されていたと思います。でも、そうではない方、生まれつき視覚を使えない方々に、明るさとか暗さというのを上手に説明しようとした時に、どういう例えがあればいいのかなということ、家内と今朝話しておりました。あとは色についても、どういう説明をするのがいちばんいいのか。これは広瀬先生だけでなく鳥山先生にもお尋ねしたいなと思います。

**広瀬** 模範回答は後で鳥山先生にしてい

ただくとしまして、まずは僕のまったく個人的な意見です。とくに色のことなどは、究極的にはどうしようもない、伝えようがないですね。もちろん先天的に見えない人も、血は赤いとか青信号とか、知識、概念として色を認識しているわけですけど、「じゃあ赤ってどんな色なの？」と質問された時に、やはり見たことがない人に具体的にイメージしろというのは無理です。だから、世の中には触覚や言語に置き換えられない視覚情報もあるということをお大前提として押さえないといけませんね。

ただし、僕たちの日常生活には視覚情報が溢れていますので、色などをまったく無視する、あるいは知らないままで暮らすのは、ある意味しんどいことです。そうなるという言葉で伝えるしかない。最近新しい機械が開発されていて、センサーを当てれば色の名前を教えてくれる優れ物もあります。そんな機器と晴眼者からのアドバイスを併用して、上手に服のコーディネートとかお洒落を楽しんでいる全盲の方もいます。究極的には伝えられないことはありますが、ああだこうだと言葉で色を表現しようとする努力は必要だと思います。

ちなみに視覚障害者といっても、さまざまな見え方があります。僕は全盲ですが、じつは真っ暗ではない。全盲でも人によって違うようですが、僕の場合は視野全体がなんとなく薄紫色です。

これが何の色なのか、網膜の色なのか、医学的なことはよくわかりません。できれば薄紫じゃなくてピンク色とかの方がよかったかなと思うこともあります（笑）。この薄紫、どんなに光が当たっても、あるいは眼前で手を振っても、何も変化しません。ただし視覚的に認識できなくても、太陽の光は熱で、手などの障害物はなんとなく風圧とかで察知するわけです。

視覚障害者の中で意外に多いのが、「光覚」と呼ばれる人、ほとんど見えないけど光を感じるというタイプです。白杖を使用しているけど、強い光が来ると「あっ、まぶしい」とか「あっちが明るい、こっちが暗い」などがわかる視覚障害者がけっこういます。これは個人的な問題なので、見え方について聞かれるのをいやがる人もいます。でも、美術館とか博物館で視覚障害者のガイドをする際には、できればその人の見え方がどれくらいなのかを把握しておいた方がいいと思います。弱視の人の見え方は多種多様で、どこまで説明、誘導すべきなのか迷うケースがあります。失礼にならない範囲でさりげなく来館者の障害の状況を確認しておく、失敗やトラブルも減るはずですよ。さて大先生、模範回答をお願いします。

**鳥山** 人間は光つまり可視光線の部分が見えて、他の波長の光は見えていないわけですよ。たまたま人間がそうであるということで、五体満足の人にわからない自然界の情報がいっぱいあります。

そんな人間の中にも、可視光線が見えない人たちがいるということですね。ですから、もしみんなが見えていなければ見る必要もなかったわけで、可視光線が見える・見えないというのは、その人の生き方自体には何の関係もないはずですよ。明るい・暗いがわからなくても、光、色が見えなくても、何の不便もない話だと思います。

ただ、障害というものの辛いところは、障害を持つ人が少ないことです。社会の大部分の人は見えるので、見える文化というのが当然ありますよね。その見える文化を、やはり視覚障害者も知りたいと思うらしいです。色も知りたいんですね。私たちはそれをできるだけ説明するようにしています。ごく普通に説明するようにしています。その説明がたくさん聞ければ、ほんとうに見えるわけじゃないけれども、たくさんの色体験ができます。色を話題にした体験が増えると、それなりに自分の色に対するイメージ、好きな色なんかも出てきます。全盲の人が「私の好きな色は何色だ」と言ったり、詩の中で色を書いたりすることもあります。それを嘘だという必要はさらさらないだろうと思います。

点字を使っている、視野の隅の方にあるものの色が瞬間的に見えたりするという人もいます。その人の中での色の位置はいろいろあるようです。べつにギャグ言ったわけじゃないですけど（笑）。見

る文化を共有するために、視覚障害者にとってはセンサーなどの工夫も必要になります。でも、たとえば放射線など、本来人間が見えていない部分のいろいろな波長については、だれも見えないから気にしていません。見えないから怖いんですけどね。みんなが見えないものは、みんなセンサーを使って見ているわけです。

それから次に理科の勉強としては、やはり世の中に光があるということ、その光の性質については知っておく必要がありますので、それは光を音に変えるセンサーを使って学習しています。理科教育のことを話すと、また長くなりますので省略します。私たちの科学の体系の中に光というものがありますので、その基本については理解しなければなりません。自ずと限界はあると思います。

**○さん** 私は、今は見えないし、視覚の記憶は明暗だけです。明るい・暗いについては、要するに日差しが当たってたらなんとなく明るいような気がするし、トンネルのような所に入ったら気温が下がるでしょう。そしたら暗いような感じがする。何年か前、日蝕があって急に寒くなったんです。ということは、たぶんそれは真っ暗になったんでしょう。周りにいた見える人たちも「ああ、暗くなった」と。外側に金環食ですか。それは異質の体験だったので、その暗さはよくわかりました。

それから色ですが、私はできるだけ説

明してもらった方がいいと思っています。  
私はあきらめが悪いというか欲張りなのか、たぶんわからないんだろうと思いつつも、絵について知りたいし、自分でも絵を描きたいという気が今でもあります。べつに絵なんかわからなくても、どうってことないとも思うんですけども、やはりあこがれる。それとともに私は触覚を基本にしたものも大切にしたいし。世の中の美しいものは、できることならわかりたいという、なんともあきらめが悪い見えな人です。